



キャンパス散歩

東京大学三崎臨海実験所散歩道

森沢 正昭
大学院理学系研究科
臨海実験所長 教授



三 崎は神奈川県三浦半島の西南端にあり、東側は東京湾、西側は相模湾に面し、晴れた日には富士・箱根・天城の山々が一望できる。地形の変化に富み、相模湾の深海を控え、黒潮に乗って様々な動物がやってくるから昔から生物の宝庫といわれてきた。臨海実験所はこの三崎の地の油壺湾・諸磯湾の入口にあり(1)、外洋性の生物のほか、内湾性の生物にも恵まれ、周囲の環境は岩礁帯、砂泥帯、藻場など多様で、諸磯崎・小網代湾には多くの潮間帯生物群集がみられる。

散歩道は海辺から始まる。冬は季節風が強く吹き、流れよるウツクダ、サルバ類など多くの生き物に出会える。また、実習や研究に使われる、クサフグ、カイメン、ホヤ、ムラサキウニ、バワンウニ、イトマキヒトデ、巻き貝、二枚貝などは四季を通じて見ることができ。最近では沿岸の水質も多少良くなり、ツバサゴカイ、ナメクジウオ、シャミセンガイなども復活の兆しをみせている。

理学部動物学教授佳作吉は、医学部教授であったデールラインから三崎の生物の豊かさを伝え聞き、三崎の町の北条湾に面する入船の幕府船番跡の敷地七〇坪に建坪五三坪の実験室、標本室、図書室、寢室などを持つ小さな木造二階建を建てた(2)。地名をとって通称三崎臨海実験所と呼ばれる東京大学臨海実験所の始まりである。米国のウツスホール、英国プリマス臨海実験所より二年早い一八八六年(明治十九年)のことで、今にして思えば、明治の先達が近代国家創成中の困難な時期に、基礎的生物学の研究教育のための施設を世界に先駆けて設立したことに驚く。

この建物は一八九七年(明治三〇年)に、より生物相の豊かな現在の油壺の地に移築された。海辺から数十歩あるくとその場所に行き着くが、今は移築された建物の姿はない。払い下げられ、鉄工所として昭和四〇年代まで三崎の町で働いていたと言う。この新しい敷地は、その昔小田原の北条早雲に攻められ滅亡した三浦一族の最後の居城のあった所で、三浦の亡霊が出ると人々は恐れ、近づかない手つかずの森であったという。同じ場所に明治末期にいくつかの木造の建物が増築されたが、一九三三年(大正十二年)の関東大震災で大きな被害を受けた。現在、当時の棟が健在で(3)、神奈川県明治の建物一〇〇選にも選ばれている。その天井に彫られた透かし彫り、特にウミテングは印象的である(4)。外へ出ると右手に震災をきっかけに一九三六年(昭和十一年)に新築された、スクラッチタイル張二階建旧本館(日本海洋生物学百年記念館―通称記念館)を見る。中は臨海

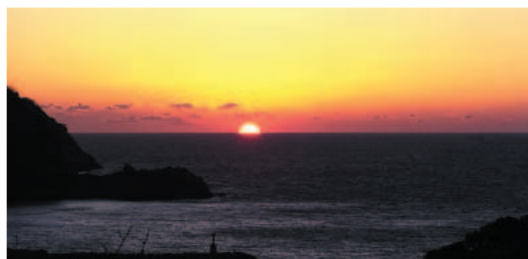
実験所特有の懐かしいにおいがする。この建物は長年研究教育の場として使われ日本の臨海実験所のシンボルの存在であった。この建物は海から見るとエキゾチックな雰囲気を感じさせている。新しい棧橋に横づけされた新臨海丸(一〇〇〇m以深の深海探索が可能な研究調査船で一九九六年進水)の後方に堂々とした姿を見せる(5)。

記念館を出てすぐ旧水族館(6)に到着。正面に水族室・標本室と書かれた古いプレートが張り付いている。この建物は一九三三年(昭和七年)に新築され、一般に公開されていた。しかし、一九七一年(昭和四十六年)にその公開を中止してしまへた。今、建物は補強が済み、壁面のスクラッチタイルも新しい。しかし、一階では、当時多くの人が相模湾の生き物を楽しんだ壁面水槽はガラスに亀裂が入っており、二階には多くの学術標本が展示されていたが、それもかなり保存状態が悪い。館内が整備され、一般公開が再開される日が待たれる。

水族館前から右手に千駄矢倉を見ながら長い坂道を上っていく。崖に掘られた洞穴で、千束の矢を保管できる倉庫という意味らしい。しばらく登ると右手に油壺湾を左手に相模湾を一望できる馬の背に着く。左右が崖で、ちょうど馬の背中を渡っている気分である。油壺湾の海面は合戦の時に流した血で海面が油を流したようになっていたとの説の通り静かだ。左手相模湾の霧が晴れば、くっきりと美しい富士山と遠くに大島を見ることが出来る(7)。

もうひと登り行くと広い緑の芝生に出る。この場所は三浦一族の新井城の本丸があった所で、一九七六年(昭和五一年)に新しい宿泊棟ができるまでは、木造平屋の趣ある旧宿泊棟があった。今は一九九三年(平成五年)に竣工した新しい実験研究棟(7)がある。一階にセミナー室、会議室、水槽室、アイソトープ実験室などがあり、二階には、発生生理、生化学、系統分類、遺伝子の実験室などがあり近代的な研究設備が整っている。先に見た記念館は臨海実習等の教育活動、フィールドワークの場として利用されている。

新実験研究棟の正面玄関を出て、左へ向かって歩くと大手門があったと思われる小さな切り通しを通る。すぐに左右が小高くなっている小道が交差してくる。これは道ではなくて空堀だった。ここで鋸形が出土したことから激しい戦闘が何われる。空堀を散策してから元の道をまっすぐ行けば、青い大理石で作られた正門に至る。有馬朗人先生の筆で東京大学臨海実験所と彫られている。夕日を見てから(8)宿泊棟に到着、静かな散策は終了だ。



8 相模湾に夕日が沈む



7 新しい実験研究棟



6 旧水族館



5 海洋生物学百年記念館(旧本館)



4 ウミテングの透かし彫り



3 現存する明治の建物と朝の富士山



2 入船時代の最初の臨海実験所